小学校の早期英語教育を積極的に取り組むべき

前川雅志議員

問 子供のころから生きた英語に慣れ親しむことは、人として幅広く国際的な感性を持つために、小学校からの英語教育が不可欠と考える。

私が小学生のころは国際交流指導員もいないし、外国人に会う機会もなかった。まったく免疫がないまま、6年間英語の授業を受けたが、「アイアム ア ペン」程度の英語能力しかない。

私だけではなく、今までの英語教育でどれほどの子供たちが英会話をできるようになったか個々の差はあると思うが、子供のころから英語に慣れ親しむ環境を作ることにより、子供たち自身がグローバルな考えを持ち、これからの人生の選択肢を大きく増やすものと考える。その環境を作り出すことは、大人としての責務と考える。

昨年の第二回定例町議会において同趣旨の質問が出され、その後、中教審としての答申はまだ出てきていないが、教育委員会として約8カ月の間、現場と研究を深めてこられたことと思う。

昨年の暮れの文部科学省の概算要求に、「小学校英語活動指導力向上事業」が盛り込まれたが、この事業は、「小学校英語活動地域サポート事業」と「英語指導力開発ワークショップ」の2つがあり、3月に申請の受付が始まり、早期英語教育への国としての新規事業がいよいよスタートしようとしている。

教育委員会としても鋭意研究されてきたとは思うが、これまで行ってきた総合的な学習の時間におけるカリキュラムの組み立てを一考し、全国に先駆けて国費を有効に活用した取り組みを積極的に行うべきと考えるが、見解を伺う。

教育長 英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として、21世紀を生きる子どもたちが、英語の基礎的・実践的コミュニケーション能力を身につけることは不可欠であり、今後ますます重要になって来るものと認識しているし、将来的に国際舞台で活躍できる人材を育成することは非常に大事なことと理解している。

早期英語教育については、❶国際的なコミュニケーション言葉であること、❷国際理解に最も役立つ言葉であること、❸児童期は英語学習の最適期であることなどの賛成派の考え方がある一方、反対派の考え方としては、❶指導者、教材、指導法などの課題を抱えていること、❷日本の文化、伝統、日本語の正しい使用法・表現などを習得させ、基礎的学力を養う方が先決との考え方、❸アメリカの幼稚園や小学校で行っている「ショー・アンド・テル」といったように、単純な物事を母語（日本語）で説明できる学力を養う方が先決であるというように、それぞれ賛否両論の意見があるとされている。

小学校の英語教育活動については、今、文部科学省の詳しい事業内容が降りてきていないが、モデル事業の活用を図りながら、小学校と中学校の連携のもと、小学生段階からの英語活動について取り組むことの必要性、あるいは課題等についての研究をし、幕別町ならではの結果を検証してみたいとの考えを持っている。

なお、「総合的な学習の時間」との関係については、現在、町内9校の小学校のうち、6校が国際理解教育の一環として、簡単な英語による挨拶や遊びをカリキュラムに取り入れているが、総合学習については、平成14年度から各学校が創意工夫を生かし、学校独自の考え方の中で計画的に、継続的に取り組んできている経緯や、学力の向上のため、基礎・基本の定着に向けた時間に充てている状況等もあることから、「総合的な学習の時間」の中に一定時数の英語活動教育を取り入れることができるかなどのカリキュラム編成上の課題もあるので、文部科学省から示される事業概要を見極め、さらには各学校現場の意見・考え方等を聞きながら前向きに検討していきたい。

国際理解教育で英語に親しむ古舞小学校の生徒